

# 相馬御厨

(そうまのみくりや)



現在の木野崎付近

野田市の現行地名のうち、その名が文献史料の中で最も早く確認できるのはどこでしょうか？それは天養 2 年(1145)の「目吹(めふき)」、翌年の「木野崎(きのさき)」で、いずれも相馬御厨という、伊勢神宮(三重県伊勢市)を領主とする荘園(しょうえん)の古文書に登場しています。

御厨は、本来は神に供える魚貝を調進する屋舎という意味でしたが、しだいに伊勢神宮と賀茂社(京都市)の神領を指す語に転じました。とくに伊勢神宮の御厨は、12 世紀になって東海・関東地方に多く設定されました。下総国(しもうさのくに)では、夏見(なつみ)御厨(船橋市)、葛西(かさい)御厨(東京都江戸川区周辺)、武蔵国(むさしのくに)では、大河土(おおかわど)御厨(埼玉県松伏(まつぶし)町)などが知られ、いずれも海や河川に面した場所に位置しています。

大治 5 年(1130)に平常重(たいらのつねしげ)は、相馬郡の土地を伊勢神宮に寄進(きしん)し、現地の管理者・下司職(げすしき)になりました。寄進状によると、そこは先祖の平良文(よしふみ)から代々伝わってきた土地で、今後は米・雉(きじ)・鮭(さけ)などを納入すると約束しています。領域を示す四至(しいし)として記された場所は、現在の地名でいうと、東は茨城県利根(とね)町、南は柏市篠籠田(しこだ)と手賀沼、北は茨城県つくばみらい市足高(あだか)と鬼怒川(きぬがわ)で、およそ千葉県我孫子(あびこ)市と茨城県取手(とりで)市を中心とした地域に当たります。

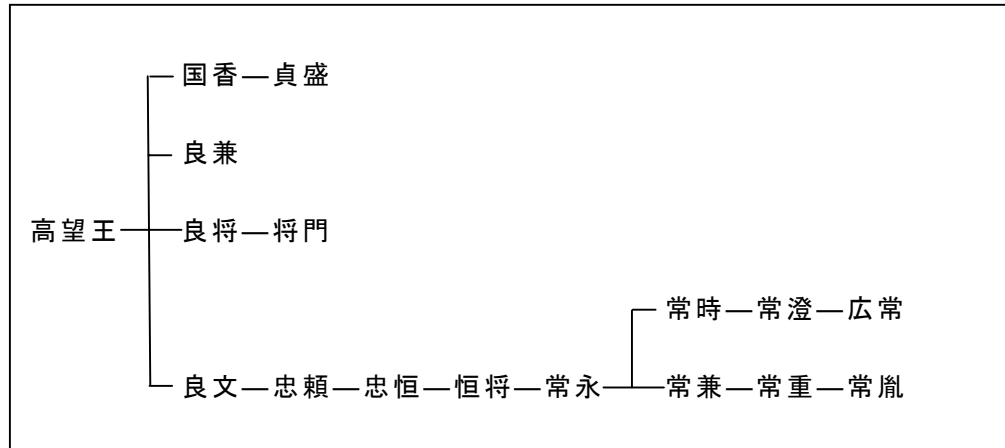
その後、相馬御厨の管理権をめぐる、三つの勢力が争うことになりました。つまり a 平常重の子の常胤(つねたね)、b 常重の従兄弟・平常澄(つねずみ)と手を結んだ源義朝(みなもとのよしとも)、c 下総国司(こくし)・藤原親通(ちかみち)との関係を主張する源義宗(よしむね)の三者で、それぞれに下司職の立場を主張して伊勢神宮に寄進状を提出しました。それらに記された四至は少しずつ異なっていますが、源義朝の天養 2 年(1145)の寄進状には、西限が「目吹岑」、平常胤の久安 2 年(1146)の寄進状には、西限が「下川辺(しもこうべ)の境ならびに木崎廻谷(きのさきめぐりたに)」と記されています。つまり、野田市の目吹・木野崎が相馬御厨の最も西に当たっているのです。

平常胤は、千葉郡を拠点としたので千葉常胤と呼ばれ、後に源頼朝に従って鎌倉幕府の創建に貢献し、下総国の守護(しゅご)をつとめました。相馬御厨の管理も、その子孫に委ねられています。野田市域の東側は、桓武平氏に伝わった土地で、伊勢神宮の財源を支える御厨となり、さらに千葉氏の拠点の一つと位置付けられたことがわかります。

《詳しくは…》

\* 岡野浩二 1996「相馬御厨の成立とその前提」『野田市史研究』第 7 号 野田市

桓武平氏略系図（『尊卑分脈』による）



相馬御厨と  
その周辺の荘園（12世紀）



河川・湖沼、郡境は推定